血液内科

●スタッフ（2020年10月1日現在）

診療科長　後藤　明彦
医局長　古屋　奈穂子
病棟医長　赤羽　大悟
外来医長　田中　裕子

医師数　常勤　14名
　　非常勤　2名

●診療科の特徴

高齢社会の到来により、造血器腫瘍をはじめとする血液疾患が増加している。とりわけ悪性リンパ腫、多発性骨髄腫、骨髄異形成症候群が顕著であり、患者数が増加し血液内科のニーズが高まってきた。血液領域には様々な疾患があるが、当科は主に造血器腫瘍、造血障害を担当している。特に腫瘍性疾患の病態解明、分子標的療法の開発に取り組んでいる。また同時に同種造血幹細胞移植を積極的に行い、免疫病態の解明にも力を入れている。

●診療体制と実績

1）外来診療体制と実績

血液内科が診療する疾患は、白血病、骨髄異形成症候群(MDS)、悪性リンパ腫、多発性骨髄腫に代表される造血器腫瘍や再生不良性貧血、溶血性貧血、多血症、血小板減少による出血性疾患などである。血液疾患に対する治療の進歩は著しい。新しい分子標的薬や抗体療法が導入されてきており、これらの最新の知見を積極的に取り入れている。経験豊富な専門医を中心として、エビデンスに基づいた最善の治療法をきめ細やかに患者さんに提供している。また無理なく治療が続けられるよう外来化学療法センターとの連携も行っている。図1に日本血液学会に疾患登録を行った2020年度の疾患別割合を示す。

2）入院診療体制と実績

血液内科は32床を有し、骨髄移植や末梢血幹細胞移植などで使用されるクリーン度の極めて高い無菌病棟（10床）を備えている。化学療法後の一過性免疫不全状態でも、患者さんはこの無菌室内のケアにより日和見感染が予防され、治療成績の向上がみられている。また入院患者は、白血病などの難治性疾患を扱う機会が多いため、十分に情報を提供した上で適切な検査法や治療法を提供している。さらに日本成人白血病研究グループ（JALSG）や厚生労働省科学研究費補助金・難治性疾患克服研究事業に参加し、標準的治療法の検証や新規治療法の開発に取り組んでいる。図2に2020年度の入院診療実績を示す。また図3に移植症例の割合を示す。

図1．2020年度外来患者疾患割合

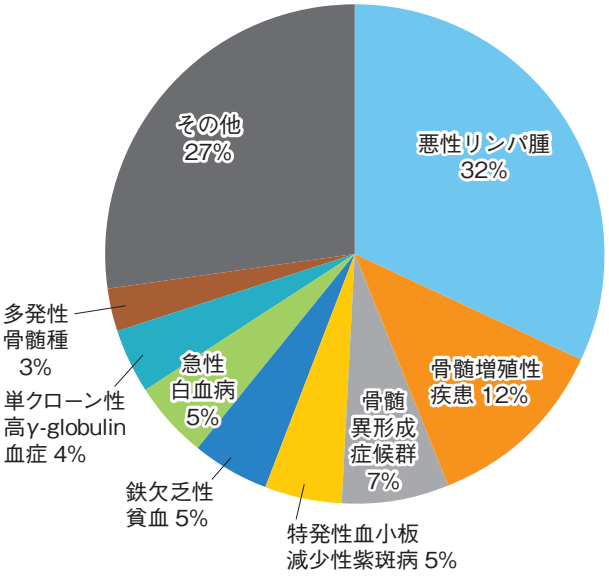

図2．2020年度入院患者疾患割合

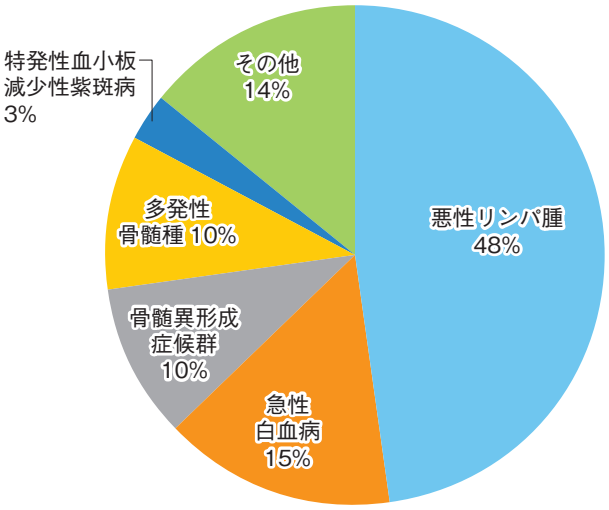
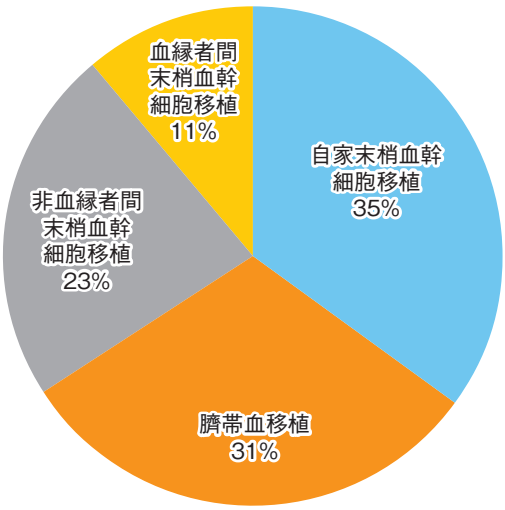
図3．2020年度移植割合